

相生町の峠道

民俗班（徳島民俗学会） 橘 禎 男¹⁾

1. はじめに

相生町は、昭和31年（1956）に相生、^{のぶの}延野、日野谷の三村が合併して誕生した、面積100.45km²の町である。山林面積が全体の約87%を占めていることからわかるように、町の中央を東西に流れる那賀川と、その支流の谷内川、紅葉川、赤松川、陰谷川の周辺には山地が広がっている。東は^{わじき}鷲敷町、阿南市、南は日和佐町、西は上那賀町、北は上勝町、勝浦町の六市町村と接しているが、それらの境界は殆ど400m以上の山の尾根上にある。

交通路は、那賀川を利用した舟運の他に、陸上では明治31年（1898）、那賀山分では最も早く開通した竹ヶ谷鷲敷線の車道があった。現在、那賀川に沿って国道195号が通り、県道の竹ヶ谷鷲敷線、阿南相生線、阿南鷲敷日和佐線などが国道とつながっている。

今回の調査は、県道竹ヶ谷鷲敷線沿いの相生地区を中心に、徒歩が主な交通手段であった時代の峠道に焦点を当てて、そのルートと現状、峠道に残る石造物を主とした民俗資料を明らかにするために行った。現地調査は、主に平成12年10月9日から12月27日までの間の9日間である。

2. 相生町の主な峠（図1）

1) 馬路峠 645m

馬路と勝浦町立川を結ぶ峠で、立川越ともいう。馬路側の道沿いに山の神が祀られているが、峠に石造物はない。大正期にできた、馬路から立川までの^{きんま}木馬道があった。

現行の国土地理院の2万5千分の1地形図には、相生町と鷲敷町境に「馬路峠」と記されているが、その地点より西500mの尾根上が、馬路峠の正しい位置である。

昨年完成した橋湾発電所の送電用として、鉄塔が峠に立てられた。勝浦側の道は、整備されていて歩きやすいが、馬路側は使用されなくなったため、崩壊が各所に見られる。

2) 蟹ヶ峠 700m

内山と上勝町福原を結ぶ峠。「右ハ 西納道 左ハ 馬治道 施主 吉ヶ平中」と刻まれた道標と、「施主 仁宇村 富治日用 大田井村 作左衛門日用」の銘のある高さ38cmの地藏尊（図2）がある。2つの石造物より、この峠道は馬路にも通じていて、仁宇（鷲敷町）や大田井（阿南市）の人もよく利用していたことがわかる。西側に美杉峠ができて

1) 徳島市国府町日開42-5

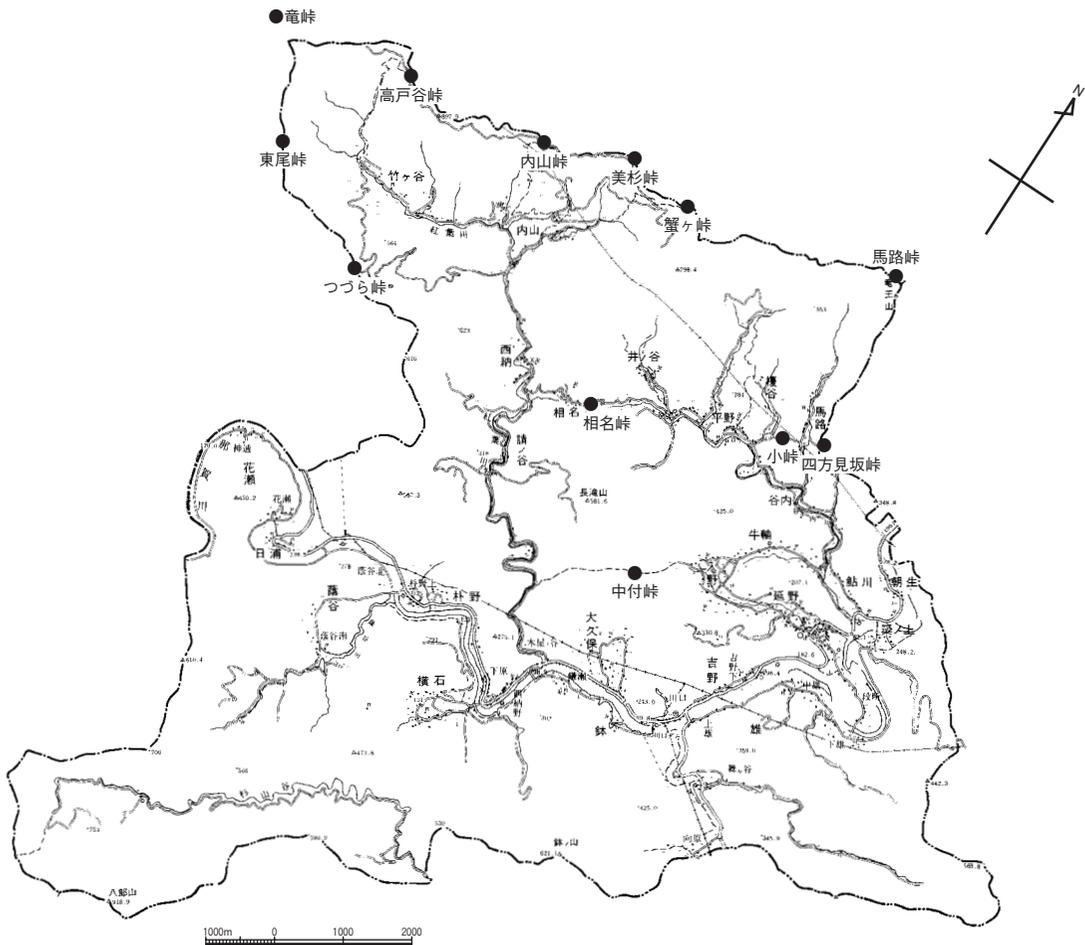


図1 相生町の峠

利用されなくなったが、内山から登る道と峠の雰囲気は残っている。

3) 美杉峠 700m

昭和59年(1984)11月、林道杉地白ヶ谷線の開通によってできた新しい峠。

4) 内山峠 685m

内山と上勝町杉地を結ぶ峠で、杉地峠ともいう。両地区は姻戚関係も多く、往来に峠道が使われたが、上勝町八重地で買い付けた牛を、相生へ連れて帰る時にもよく利用したという。美杉峠から西へ林道が延びたため峠は消えた。石造物はない。



図2 蟹ヶ峠の地蔵尊

5) 竜峠 1088m

現行の国土地理院の地形図「雲早山」には、1159.4mの三角点の北西の上那賀・上勝町境に、「竜峠1088」の記名がある。「阿波志」に、「龍山^{また}亦東尾嶺^{てん}に在り、石あり特立す、烏帽子と呼ぶ、村民雨乞いを為す所」と書かれている、竜王神社の祠^{ほこら}と雨乞いをした踊り石がある龍山は、地図上の峠位置より400m南東の三町の境に位置する。相生では、これらの山を竜峠と呼んでおり、「相生町誌」にも「龍峠1159.7m」として、町内第1位の高山に数えている。しかし、地形上からも、龍峠を町内に位置づけるのは無理であろう。

6) 東尾峠 800m

龍山から南東に尾根を1.5km下った地点にある。「花折りさん」の名で親しまれた峠で、竹ヶ谷と東尾間の往来に最も多く利用された。明治20年(1887)頃まで、竹ヶ谷には三軒の旅籠屋^{はたご}があったが、その内の吉野屋に残る記録によれば、宿泊者の半数以上が東尾、坂州、白石、木頭へ向かったと記されており、この峠道が那賀奥と鷲敷、桑野を結ぶ路線として如何に重要であったかがわかる。峠には、「施主 竹ヶ谷 五良右衛門」と刻まれた地藏尊(図3)が残っているが、現在は廃道になり、相生側の道は通行困難である。



図3 東尾峠の地藏尊

7) 相名峠^{あいな} 290m

相名集落の東側にあり、昭和14年(1939)に完成したトンネルが県道となっている。50m上にあった手掘りの古いトンネルは、崩れた土砂で入り口が埋まった。トンネル東口に、寛政11年(1799)に建てた地藏尊(図4)がある。地元の世話人に混じって、「讃州行者徳兵衛」の名が刻まれており目を引く。この地藏尊は上の峠にあったが、トンネルの完成により現在地に下ろしたといわれている。



図4 相名峠の地藏尊

8) 小峠 155m

平野と馬路の間にある小さな峠で、相名峠と同じ県道上にある。明治期、ここにもトンネルがあったが、崩落したため掘り割りの峠となった。峠の西側に寛政9年(1797)に建てた地藏尊(図5)があるが、ひび割れや剥離のため銘文が判読しづらい。

9) 四方見坂峠^{よみ} 180m

馬路と鷺敷町仁宇を結ぶ峠。町境がトンネルになっており、その上に古い峠が残っている。馬路側の坂道横に、2体の弘法大師像と3基の五輪の塔などの石造物が祀られており(図6)、1体の大師像には「文政13寅天(1830)」の銘がある。



図5 小峠の地藏尊



図6 四方見坂峠の石造物

10) つづら峠 630m

西納と上那賀町白ヶ谷を結ぶ峠で、かつては宮浜、木頭方面へ通じる要路であった。峠の250m東に地藏堂があったが、大正10年(1921)頃つづら口に下ろされた。江戸時代の作といわれる高さ60cmの地藏尊は、金箔塗りで彩色の優美な像である。つづら坂にあった丁石も下ろされたが、元の位置にはお堂の礎石が残っており、また近くには「右 竹ヶ谷道 左 白谷道 施主 久兵衛」と刻まれた道標もある。

3. 相生町の峠の特徴

険しい山に囲まれた相生地区は、他村との交流は殆ど峠道に頼った。そのため延野、日野谷地区に比べて峠数が多い。「相生の昔のはなし」には、相生地区から42話が出てくるが、その内15話に峠名が出てくる。峠が生活に密接につながっていたことがわかる。

相生地区を東西に通る仁宇—馬路—平野—西納—竹ヶ谷—東尾の路線には、上述のように四方見坂峠、小峠、相名峠、東尾峠の四つの峠があり、その全てに石造物がある。しかし、竹ヶ谷の湯屋のように、峠以外にも石造物は多い。それは、このルートが生活道の役割の他に、太竜寺と黒滝寺を結ぶ信仰の道であったことを物語っている。

街道沿いの寺院やお堂を含めた調査を進めていけば、このことがもっと明らかになると思われる。今回は、期間が限られていてできなかったが、残された課題の一つである。

4. 峠の保存と活用

昔、秋の夜なべに歌っていたという「^{もみ}糲すり歌」に、「阿波の徳島那賀川へ 一度はおいで鮎狩りに 山は紅葉に包まれて 里は黄金の花が咲く」という一節があるが、このふ

るさとの原風景はどこへ行ってしまったのだろうか。山道は杉林の下で薄暗く、花や動物に出会うことも稀で、峠に立っても周囲の景色が見えなくなった。

最近、自然林を復活させる動きが見られるようになったが、人と自然、人と人との関係や交流を考える上で、歴史ある峠道をもう一度見直してみる必要があるであろう。その認識があって、次に峠の保存や活用の具体策を考えることになる。

5. おわりに

今回の調査に際して、多くのご教示を賜りました地元相生町の、東浦武次、津川武利、能登一敏、長江隆、橋本玉雄、坂田仙太郎、西上賢一の各氏に深く感謝いたします。

参考資料

相生町誌編纂委員会編『相生町誌』相生町役場 昭和48年

相生町『相生の昔のはなし』相生町高齢者役割対策推進会議 平成4年

徳島県郷土文化会館民俗文化財集編集委員会編『相生の民俗』徳島県郷土文化会館 平成2年